の比較に見られる著者一流の史観やフランス文学に対する深い造詣が到る所ににじみ出ていて、無味乾燥な史実を補い、最後の頁まで面白く読ませる著者の力倆は高く買われねばならないであろう。また各章のはじめには気のきいたレジュメ（要約）があり夫々の時代を東洋やわが国の歴史と比較して読者に正確なイメージを与えようと努められ、更に巻末にはフランス史学史、参考書、フランス史略年表等が収められていて、いかにも行きとどいた良心を感じるのである。

こうして数え上げると実際良い点ばかりであるが、若し強いて難点を挙げよと云われるならば、それは十九世紀以降の現代史の記事が中世や近世初頭に比べると著しく簡単で、またその叙述も他の箇処に比して精彩を缺くことである。もとより筆者は近代や現代の歴史の方が、古い時代の歴史より重要であるといつた歴史学の地方人根性を持ち合わせているのではない。しかし概説として他の箇所との均衡から考えても、また十九世紀を通じてフランスの世界史に占める位置から考えても現代の方に今少し重心を置かれるべきではなかつたであろうか。とは云え、フランスを近代のギリシアにたとえられる著者にとつては産業革命以後の現代世界でフランス文化は既に使命を果した過去のものであり、この古い文化をいかに新しい世界に適応させようかと苦悩しているフランス国民の姿を詳しく見るに忍びなかつたのかも知れない。

それは兎も角本書は高い学問的水準とフランス的機智と周到な配慮から出来上つている唯一の日本語で書かれた信用の置けるフランス通史として歴史家はもとより広く一般の人々にもおすすめしたい。（創元社一九五四年二月発行。定価四〇〇円）

——豊田　堯——

J. E. Spencer: Land and People in the Philippines. — Geographic Problems in Rural Economy. — (1952)

フィリピン群島を扱つたすぐれた地誌の労作は、個々の断片的な経済地誌を除いては、他地誌に比し、意外に少く、米、独研究者によりわずかに著されたのみである。

米国の研究者 Alden Cutshall, Warren D. Smith, Herbert W. Krieger, S. V. Valkenburg, L. J. Borja, George S. Case 等は群島の資源をとりあげ、一部は農業地帯の区分にまで及んでいるが、その他は主に経済地誌ことに農業関係の報告が多く、農業経済、農業政策方面に寄与せんとする意図を有していた。これに反し、独研究者による労作は W. Tuckermann の Die Philippinen. 1926. の如く、群島全般をとりあつかいながらも個々の要素に分析せず、ただ他地域とは異つた特性のみをとりあげまとめた、小冊子ながらも要を得たものがある。また A. Koll の論文に見られる如く、農業地帯の設置を更に進めて農業地区の設定にまで及んでいる。彼の叙述が図式的に偏りつつも最後に地域区分を目標にしていることは注目すべきである。ただ我々にとつて物足りなく感じられる点は、農業地域における発展段階を歴史的に考察せんとする意図が余り見られぬ点である。ことにスペイン領時代の状態が開却されているので現在の地域といつても極く薄い時の一断面を扱つているに過ぎず、景観の推移を見んとしてもその過

程及び速度が推察し難い。しかし、一方では毎年更新されるフィリピンセンサスを活用し年度別比較、空間的には各州別比較を容易にしている。この傾向はとくに米国の経済地誌的な著作に多い。ただセンサスを使用する結果、政治的境界に拘泥しすぎたきらいがあり地理的に不合理に思われる個所が見られた。

Robert L. Pendleton: Land Utilization and Agriculture of Mindanao, Philippine Islands. (Geogr. Rev. Vol. 32, 1942)の発表以来、次第に地理的に合理的と考えられる地域区分に進むようになり K. J. Pelzer: Pioneer Settlement in the Asiatic Tropics. 1945 は地誌ではないが Mindanao 島の開拓過程を取扱うに際し、Pendleton の調査資料を活用している。Pelzer がジャヴァ島と開拓過程について比較する際自ら regionalism の問題に直面したわけであるが、比較そのものが開拓という項目に関する部分的な比較であつたため、余り関心を示していない。最後に今回とりあげたのがカリフォルニア大学教授 J. E. Spencer: Land and People in the Philippines である。著者は明確に regionalism を localism と分離し、より広義な、より地理的ないわゆる地域性を充分に発揮し、活用せんとする方向をとり始めた。「基本的な regionalism に関しては群島の現在の状態はまず地域区分において表現される。種々のパターンは regionalism による区劃を可能ならしめている。これらのパターンは多くの個々別々の要素より作られたものである。regionalism は自然景観そのものからまずみちびき出されるが、気候・植生・干拓・土壌等、土地利用の種々のパターンによつて更に寄与される。農業・林業・漁業・鉱業・工業等のパターンによつて推進され、更にグループによつて、心理的に、民族的に、宗教的に、群島を形成している種々異つた住民及びその文化のパターンによつて促進される……」と。地理学における「地域」概念が同一性を基準とすることは社会組織、経済組織の進んだ段階にある地域にあつては説明しつくす力をもたないと云われるが、群島が住民の九〇%以上農業に依存する農業地域であり、都市よりも農村、しかもその経済に関する地理学的な問題を扱つているので、我国や欧洲各国とは異つた比較的単調な性格を有している点を想起すべきである。群島では「地域」の概念に同一性を基準とすることは一応許されるであろう。J. E. Spencer はすでに Abaca and Philippine (Econ. Geogr. Vol. 27, 1951) 中、及び G. T. Trewartha との共著 The Development of Upland Areas in the Far East. 1949 中でも判明するように政治学者、経済学者の手に及ばない農業地域の実地調査を行い具体的な事実に立脚して regionality の把握につとめている。ただ統計資料を未だ戦前のものを使用していたのが唯一の欠点であつた。ところが今回のは、フィリピンが共和国として発足した後の一九四八年センサスを可能な限りに駆使し、フィリピン大学の Andrés V. Castillo その他の研究者の実地調査した資料によつて欠を補い、群島全般を扱つた地誌としては最新の最も信頼し得る著書と云える。

本書の内容で特に注目をひくのは、共和国の独立前後の Rural Economy の変化、とくに年度による比較が一つの支柱となつて終始一貫して表れていることである。地誌的叙述に関してはかつて Cressey: Asia's Land and Peoples に見られたような図式的な方法は採

用していない。先述の支柱とともに一応各項目別に、即ち地域を構成していると考えられる各要素を相関連させつつ各地区に結びつけて叙述している。

第一章、第二章はまず基本的とみられるregionalismにより簡潔に各地域を要約し、とくに経済的、歴史的regionalismが如何なるものか具体的に示している。regionalismがlocalismとは意を異にした地域の特性をより発揮せしめんとする意図をも有しているのならば、著者の云う経済的regionalismは理解出来ても歴史的regionalismと云うのは文中では理解が困難であつた。むしろ文化的regionalismと称した方が分り易いように思われる。

第三章以下は人口の分布状況の変化につき州別人口密度を算出し、土地開拓の地域的変化、食物供給状況を相関連しつつ細部にまで行届いて述べられている。

次にHinterlandとの輸送関係、貿易上におけるバランス・アンバランスの問題と関連して農作物の内地・外地への販売を各地区別に簡単に述べているが、これは更に次章の農作物・鉱物等の輸出に関し将来における競争問題、競争即ちコスト引下の際必然的に起る小作問題、土地所有の合理化、零細自作農に対するクレジットによる保護の必要と、絶えず関連する事柄はたとえ何度重複しても懇切に述べられている。地区によつては群島内部で植民が必要になつてくる。その間の資料には先述のR. Pendletonのミンダナオの土地利用に関する資料を活用し、附するに明快な各地区の景観写真をもつてlocal colourを直接感覚にうつたえんとしている。地形との関係の深い灌漑問題、動植物育成の方向、高地の利用、保健、社会組織等、更にHinterlandにおける政府の援助にまで及んでいるが、特に高地の利用に関しては「Caingin cultivation（一種の焼畑耕作）がかつては効果的な土地利用法であつたが、人口の急増した現在、また商業的木材の生産が多く要求されるようになつたこと、またコストを下げねばならぬ現在の競争的農業にあつては最も浪費的、無効な方法になつた」と、今尚、支配的な原始的土地利用に関し根本的な改善を鋭く説いている。

政府の援助に関しては、米国よりの独立前における依存関係、とくに農作物販売市場として米国による経済的援助の必要性を論じ、共和国として独立後もその依存の当然続けられねばならぬことを示唆している。著者の見解をもつてすれば結局、これこそ「Rural Economyを危機から脱却せしめる最も効果的な方法」のようである。その援助の方法は著者が詳述した各地区の経済状態に応じて行われねばならないとする。共和国を身体にたとえればRural Economyはあたかも内臓諸器官のようで、その諸器官を円滑に動作させんとするには、政治学者・経済学者による栄養の注入を必要とする。しかし、その故障した個所を見出し、いかなる栄養を必要とするかという診断の役割を演ずるのが地理学者の実地調査による具体的な実態把握であろう。序文中にも「この研究は共和国を危機の状態に引入れんとしたrural conditionを調査せんとする。最初の章では、フィリピン経済の構造における基本的な要素をとりあげ、批判を加えることにする…」と。

Spencerの云うregionalismにはregionalismをとくにとりあげ、政策的な方面へ

の協力を意図していることも明らかである。従つて時の一断面をとりあげ、しかも空間的には調査しうる限りの地域に拡大している。つまり歴史的な意味におけるより高次の regionalism に止揚せんとする意図は見られない。ただ彼の意図する点はくりかえしのべるが、独立後如何に群島が国家としての機能を持続出来るかという点におかれている。regionalism も国家建設のための一手段にすぎない。従つて真の高次の regionalism を認めんとしても本書では期待に外れ、きわめて不充分たるを免れない。著者の意図せる regionalism は附随された各項目の地図によつても幾分良く知られる。その表現方法はかつて R. Pendleton の著書以前には見られなかつた方法であり、基本的には landscape に重点を置いていることもうかがい知られる。著者の見解に不充分と思われる個所は土地所有問題において若干見られる。米国・カナダ・オーストラリアその他、新大陸における土地所有観念と、古代マレー的土地所有制度を維持し、さらにローマンカトリック教会による庄園制度の展開、一方では近代的な Rent System の混在する群島における所有観念とは著しく相違していることは明らかである。regionalism の意図が如何なるものにせよ看過出来ぬ問題である。本書にも土地所有問題に関し一章を設けているが、所有観念の変化を簡略に述べた後、食糧不足地域、開拓地域小作人の全農業人口に対する率等を表現した地図を附している。

ただ Hugo Miller: Economic Conditions in the Philippines. 1913 の地域的に概括的に扱つた点に比し、計量的な方面で一歩前進させたことは優れている。「借地 (Tenancy) はさとうきび・とうもろこし栽培農の間では最も甚しく行われ、野菜・果実・ココナット・アバカ・タバコ・米の栽培地帯では少い。…しかし最も地主による占有の甚しいところは米とココナットの生産地である。農場経営者 (Farm Manager) は通常は家畜・家禽類を有し、そしてさとうきび栽培にたずさわる。しかしまたより大きいココナット・タバコそしてアバカプランテーションにおいても見出される。……」と、各地区にわたって詳細には述べられていない。またわが国のように農地改革を実施し、土地所有状況の不均衡を是正しようと試みても、都市に居住し政界に乗出さんと意図している寄生大地主の理解が無いので遅々として進まない。クレジットによる零細農の援助も独立後は官吏の腐敗により極めて不行届である。Spencer も「世界の他の多くの地域において、農業に関する変化は次第に速度を増している。急速に変化しつつあり、将来は益々早く変化してゆくだろう。ところがフィリピン共和国では関係者が努力をつくすことを怠り、その地位を改善し、増進することを期待することも出来ない。……」という。農作物の海外への輸出に際し、甚しく不利になつてゆくことは疑い得ない。

根本的な解決を望むのは極めて困難なことであるが、政治組織そのものに欠陥は無いだろうか。即ち共和国の政府要人は、大部分農業地域の大地主であり、商工業資本家は極めて少い。商工業資本家は中国人、少数の米人、スペイン人であり、フィリピン人では無い。従つて農地改革を積極的に押し進めんと試みても不可能なことは明らかで、又零細自作農を保護するクレジットもかような政府から効果を期待することは困難である。かような点

に充分触れず、また各地区における土地所有問題がいかに regionalism に不合理をあたえていてるかという点が看過されているのは遺憾である。

しかし、群島の地域性をより具体的に表現せんと各項目にわたり綿密な調査を続け、丹念にデーターを整理、駆使された著者の努力には敬服の外はない。本書がまた綜合的な比較研究にとつて好適な資料たることは言を俟たない。

本書を一九五三年九月購入され、直ちに通読を許された大阪市立大学経済研究所の御好意に対し、紙面を借りて厚く感謝の意を表する。

――木村　宏――

会員移動(二)

新入会(復活会員を含む)

青木和夫　熊本第一高等学校図書館
石田明　熊本短期大学
井上一男　国府千鶴子
上田早苗　坂井徧
大月明　佐々木学
乙益重隆　島田次郎
小野信爾　島田正彦
柏尾洋介　高本正
春日丘高校(大阪府立)社会科　圭室諦成
亀田隆之　田村澄
勝藤猛　中川和美
川上貢　中山昭吉
北野耕平　野田宣雄
喬南炳　服部昌之
窪田鉄三郎　原宏一
熊本商科大学　平岡定海
本村康彦
山本幸彦
根武